夢想兵衛胡蝶物語前編

叅

へ13
3658
3

門へ13
號3658
巻3

# 夢想兵衛胡蝶物語 巻之三

東都 曲亭馬琴戯編

## 慾國

色慾

色そ元来るれりのなり。るれるあふ何とそ迷ふ。すとりくどもあるが如し。とそを楫の陽氣よ蒸まさく。春花さく小徑をへべ。花ハ是草木の媒るり。きも亦情慾の媒るり。花ちて實を締び情合して子を生ど。草木非情るれべ。花よ相慕ハど。人ときを人さく欲ぶりのハ。嗜慾の害るり。そ紙りそを元来るすといふ。桃ハ三年ゐて花さる紀。人ハ十六ゐて色情そ動といどる。草木秋よあへが凋落。男女老と告ぐ。いろけるくなりざるりのもあるべ。おのあるよ色ハ元来るとのへども。彼よ化さるとれハあるがど夫物の媒ハ人これを憎むに草木の媒ハ憎まど。これを愛して暮ると惜ま。騷客ハ詩歌を吟ト。

酒翁ハ舞踊る。况て情慾の蝶に至ては。尤も好ざるものなく。或ハ悲ひ或ハ溺れ身を忘るゝハ。これいかに應。それこそ謂あれ。茶の籠に飲鵜とこそ諭をもて酒に造れバ。飲もの酔ざといふ事なし。人その米の籠に飲をなど設られ色ハ情慾の。蝶なると然れも暁らバ。義人ハ血を包める皮嚢ゆとし可愛も寐言におかず。句袋や空炷ハ。美人の身より薫るにあふべその日くのつけものなれど。これさへあぢなる気まゝなりと。兼好法師もおそれとりそれをさておき夢想兵衛ハ。生韓非子でもあり損ひ。生雁皮紙の横紙も破られど。浦嶋翁に膏をとられ。惧へくさらかふと。顛倒して老荘ふとくあらしくと説けんと思へバ雲くさくみもとれ。女日照のその中へ。おあれど聽せざ徘徊をおもも名にあふ色慾國。中品下品と封疆でも。武道にあらし若さんる町風傾城八百八後家。牙婆針妙御妻焚妻。お乳母守子。聾女梵妻。七福腎張夷も男色。夜鷹夜饅頭に至るまでも。色に溺り色に溺れて。あさかり川さ騒しく。いさん茂兵衛河岸に小夜衣の奉加あれバ。お千代半兵衛屋敷の入聟。尻が居らバ。葛城町の不破名護屋に似し。六斎の草履市よりて。松山街道の挽久榴に色気ちがひの物もらひあり。五大力の海船問屋ハ五人づゝふ祭ふ合を定め。三勝織の茜木綿ハ。半七反の縁裂ともなど。揉ひ糸粘の看版ハ清玄鳳巾ともろともに。床番太が簷につるされ。関の小饅頭の竹の皮へ。染分手綱に結つけく。旅籠屋の門におびつかせ。童の井の水へ。与作能に濁り。藤伊の藤ハ夕霧にお裾うち枯らせど。忠兵衛姫ハ梅川を堰入れ。舩居士河原に八橋をかけし頼金をよく釧て高尾の紅葉を伐らせ。白井を汲入れて。濃紫の色揚を洗せし。お初お房が徳兵衛新田。八百屋へお七に名高く。飴賣ならお駒に若く。三日月におせんの名あれバ。糸さ〻に小糸

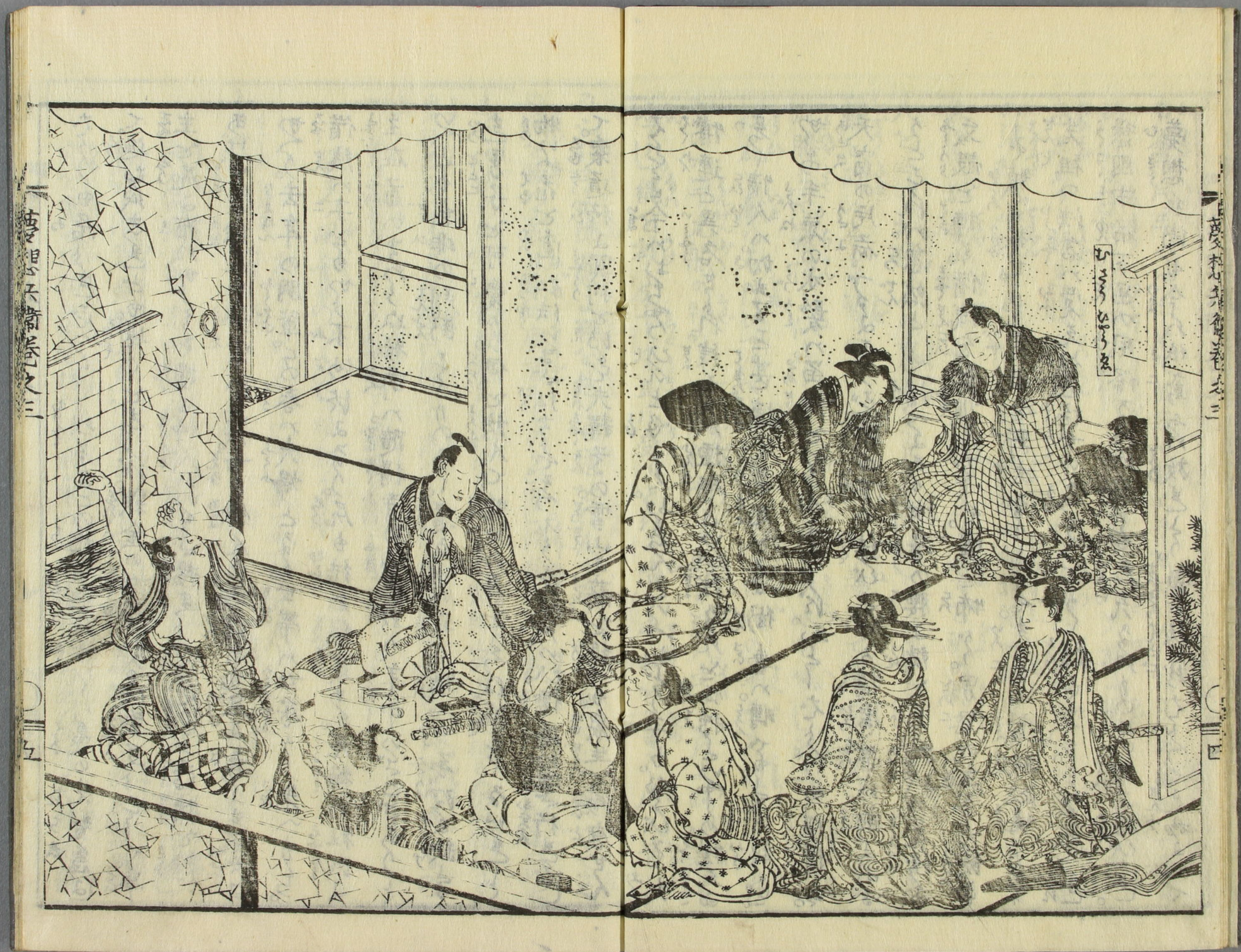
の強あり。帯屋の四十男おそんを倒れ梅枝が三百両ずゝ間を隔る。出村の玉屋玉を瑕あり。東金の下銀金を縁あり。化野の尾花八月の刀屋を拒れ。愛護の若松八手弱女を引る。浄瑠理坂の十二段目を牛若皆鶴姫の休所あれば。堀河下る町の中程を。お志ん傳兵衛が賣居あり。彩花の明鳥ぬつゝ哭を告れば。山寺の撞撞坊さを後朝を気障なる男を慶まゝ。兄弟ぶんをけるゝ。媒妁用ひらるゝ。駄婦人妻し。恋の湊の繁昌八一トされ廿四文の屋墓店。ろつくふしを押の蔭を立るのゝ武者の買食類を先へ鼻を落し。百銅ろつ紀三つの大饅氏月の朧を夜を抜ぶ。ぼちゝくのおちよと同人。比翼鳥の吸物八煮賣酒屋をあり。佐用嬢の化石八。珍物茶屋なり。玉蜀の大あぐ。夏桃のあるゝ顔ひげをもぶん山ぶん前を押へ

てきろくなる。女陽迄あゝ。乳呑子を住せ男湯よく透て。生豊後おく咽喉が湯八。西瓜のゝ売賣もをゝ直がゝり吸ゝしゝのゝ茶ゝ草八夜食の塊り程物ゝつゝ。捏業師の一本鋼優ゝとつける物び含ゝかゝひゝ隠ゝの呂札あり。八卦置の十二燈。ゝわゝど沈ねゝゝ縁諸ゝ。相生の判断あり。花綿の名祭書判八切ぶゝの墨をゝ考へ。浮気の指切髪切八。空誓文ゝ。ゝって伴のぶゝ。ぶんば二の腕へをゝる灸八。掛ぶゝ紙用てゝる。問ゝ一の固藏八。冷水賣の砂糖ゝ。ゝたゝゝ娘乃おそん婆八蟻のとゝゝ。ゝ氏の皮ゝ。ゝ夫婦。喧嘩八夕立乃花火ゝ。ゝゝ。婆ゝが居る揚弓八。ゝ汝の罫網ゝ。ゝゝ。蒲洋屋の女房敷虐でゝゝ。團子焼ゝゝ。團子鼻締。ゝゝ。會日の植木八。見合の道具建ゝ八。朝来ゝの閑帳八中宿ゝ。剃生ゝ。お乳母の

日傘。尼手でけずめて。並床で踢らるを嬢ーぐり。坊さんの金剛。雨乞よひんて子宇が内證の相談よ邪魔るり。井戸端よ聚へと紅雨夜乃品定めると疑ま。摠雪隠よ志のべと紅。未摘む鼻の臭紅て忘ま賢業の張札ハ。小使をちろのぐら讀む。在郷の幼馴深ハ都の茶飲友ぐちよちろど。妾の啓安。とまーく顔でくら。稽古所の格子さ紅。そりあげて人をとらせ。お娘さんの裏表さまて。鼻緒をしそさせると紅。隻足あげて。鰭を踏んとる驚のごく。道落坊ぐ便毒。潰て膏薬をえどるとれ。尼膝立て。羅漢よ仏ーろ。めくる按摩気水を減らし。踏みる導引放屁と厭ひど。陝いもうで廣いもの。水茶屋の前垂を結いもうで。ものハ。半元服の袖ろ。羽織。浜打する駒下結ハ。長るとれよ。跡次叔を鳴ひ。縄を被る下堪馬ハ。受るとれよ。鼻が手利を誉く居る。昔此



まるとこ。今ハおもちろひんと呼うえ。おもちろんといふおどろ子ね。婀びく大博連と異名せられ。銭ある級檀那といひ。銭るれを必持と呼ぶ。襟元よ長く情人ハ。切まる王甚速く。足元をる徹妻ハ。縛ぶ。おどべ起ど。切ぶ手東の水髪ハ。留銭をかるるよ。あるべ。おるーだるげの横梯ね。天窗の尼荷づるよ。あるど。腕の下で結びさげる幅廣帯ハ。前よ。あるうとされば。忽然とて後へよ。女房の腰よ鍵を長。細代の花活よ。反殻を挿ま。借銭を恨まどーて。嘆を怖ぐら。男児の生るーと。飲ど。して。娘よ稼せ。ろ。定級を野夫。るうとーて。色子の脇紙を嬢ーぐら。先祖の法名ハ覚えねど。柱女の名ま。くをるく請どるうの。なこれ色慾國中品下品の風俗るれば。苟くも色気る紅ものの。この異よ拵びがこ。夢想兵衛も。今ハ紙鳶ハ放まるう。毎日旅籠ま。るーて。人物よ出て


夢想天晴長之三

だらりゐ居るまどつらく以るよ。この地の人気、妻くゝ鼻の先智恵は
て。進む紙ものまども退くとまらぐ。敷金の女房ハ。ゐる尾袋笠ゝそて。亭
主と尻ま布ゝ。ゝそ揚る仲人ハいまぐ揚まゝどゝて。つゝ落情を棚へ
あげ。男ま餘んの身栄あまべ。女ま餘んの己惚あり。旦ま去ゝまて。夕ま
ゆゝ。去年の朋輩。この春ハ夫婦となる。世帯ハ女房ゝ先へゝち。
備銭ハ子どもゝ不沙汰まゝ。尻も結ね縁定めハ。死神の社改ま
ま在。首のまゝゝぬ物前ハ。隨得寺の山ま繁り。年中いざこざありと
ゝども。是非の判断ゝるゝのゝく。道ゝゝね哀と憐ゝ。義理ま缺ゝる
ま男子を可愛ゝ。偽を飲んで。晩日の月をゝゝね。誠ゝくなけまど。
物ゝ花と思ひ仏法いまゝ弘まゝ。そゝゝるゝ。沢いひ。儒道いまゝ行まゝど
て。衆道絶ま冥利をゝゝ。夫釋ゝの雪山ま薪を焦ゝも。衆生を濕度せん



乃ゝ。孔子の陳蔡ま。糧を絶ゝも。道を弘んが為ゝ。ゝれゝまくこの間へまて。衆
の病を救ゝゝど。日本の廣言ものゝひる。浦嶋仙人の教洲ハゝるゝゝ。とゝゝと
まて。一紙の告文を書写ゝ。これを竹のゝくゝまゝ。天拝山の菅丞相。崇徳院ゝゝ
崇徳院ゝゝ。家の棟へのぼゝく。高くまゝあげ。風まゝゝ拾まれば。一文紙ものゝ
切ゝゝ。雲をゝまゝと閃ゝく。夢想妄淫これをゝく。

駄ゝゝ風。食ものゝかゝひぢ。ぬゝゝゝや。

たゝゝのまゝぐ。干菓子ゝゝ。
と口吟ゝ。晩茶の餌ゝ腹をゝらゝ。誘ひ来る人をまゝ待ゝ。彼告文を拾ひまゝれば。

夫恋の病といふ。四百四病の尊盛まゝ。思案の外の難病ゝて療治ゝ
易ゝゝ。黄帝。扁一を素女ま問ふ。妙論一篇を著ゝ。釋氏慾界の
穴を塞ゝ。比丘五戒を持つ。漢武帝の返魂香ハ。結ゝ。ゝひのまゝと種まて。羅

公遠が貴妃湯ハ。二番煎じでいよ〳〵功あり。是を綴りて石雄ハ風とゑんなきとさ
藥ちがひ。松浦ハ石菜の餘毒のこ残る。男女哀慕の骨がらみハ。竟に皮
肉の腐縁となり。親類の薫菜ぢやといふべしても其の驗なく。父母の吸
ふべ血で血をあらへども愈ず。これらハ年が薬になれど病ひ劇しき時
ハ年をまさで。親分説を投て。當分の居所にまどつれ百年の命をたも
ちのぶして千日寺の土となる。豈悲しからずや。豈痛しからずや。予が家
幸に家方の良薬あり。これらの難病を救ふべし。但薬ハ調進に及ばず。
見脉を診て。病原を論ずるときハ。眼中春を生ぜしも。忽地惑ひの雲霧
て。一箇臍の下におちつき。魂入りかはつて。堅きその人となりその効恰神
の如し。病氣平愈の後といへども。毎朝仁義五常湯に堪忍五両を加へ。
絶ず服用して。餘毒を補ひあるべし。親子下がりの大さ合なし。

とぞ記しけるづくの浦でも慾をはなれぬものはなかりし。就中療治とあるさバ利
ねたる損のかねもなかり。昔から居ても悪しても只けのつかぬ意病と疑
ありし。此の人のみなそろふく迷ひの雲が立見えるからにこりやかんぶつでも
あるまいと。小ね箇のあるものへ朝から夢中兵衛が出張へ詰かくまでバならぬれ
けるしもの中人をよめれよるつて。彼も行べれもあるまいと次第に繁昌して入
口からも見れバ彼家の山寺観法に時めくぞく。人々が耳を側て聴ぞぎとされ
氣の蒲焼屋の息子内の家居が高くなつてもさもち夢中の難症ありおけ
酒屋のかみさん焼餅がこげて出るの引のといふ癪積ありころび鮎を食ふ事すし。
腹の大きくなつたらの娘あり。鏡鏡によりそまでく。ぞうく申さこむ甚だあり
それおそでの日の一十番ハまぶ三十あり四つ五つも足らぬ若後家色をこの
となり向ひ鼻もちの通りてつく用あと所覧らし。小笑婁の縞縮緬に相應なる下

見。黒繻子の幅廣帯を。前でちからと結び。おめぢ憶せぢとうち出るへごと
やうが素人めかぬ。愛敬兵衛が高坐の内とうよ勝行ようて。ちと世ろく會釋
しぶりへ。元来この國のものよあらぬ。大日本山城國山崎の百姓何がし娘
おく。夫の爲よ身を賣り。首尾の憂堪難。勤の中よ釈夫ハ非業ふ死ーと
聞もとえ。身ちくよるりて人後の世と。弔ふより外よとぐもろく。西國順礼を
ろひしちろ。るくへぬ旅路よ紀の浦あくく。北條人の宗合証吸流されて色慾
と。名とろ國へ見ーれど今いろけも。るれ夫へ。る操の寡婦ぐし昔ふ
る杵屋が三絃。それを教てやうやくよ。寡の命を継棹よ。おぢ住るんぬ枷
世帯。見るとぬ。ちるるひとつ。見ぬ孤ひハ方々の空。るうれ伶俐人
因果とろくど前の世の。るちるとねば惑ひハ見一ど神も仏もらめと。
ちで歎ハちを境。雲霞がちをあるう。晴して何ーとよ。ちくく。悪病を

るるはどえハ。ちくくうるがるくくうるうるおるるーナスもるるん上。委細の
訳ハるうちみと紫服紗よ色じる。一冊の本とり出せば。夢想兵衛受とち
て。ナニ假名手本忠臣蔵。と外題を読でちら点孔。ちくハるりハ塩谷の浪
人早野堪平とちくあるとるどのでぐる狂と同見て。ちぐーさー傳ち。
恥しるのぐるその時がるるる果でぐざうまるて。ちるるのおる女郎が。今ハ
見ち見と視じるのぐる。悪の病の療治ちけるハ。何とくるもうるとちと同へぐ
間ちるく小膝をちるめ。ちれぐるるるでぐざうまると。病ハ原と補ねば全快ハ
せぬとやうるちくくハが病根ぐでるるるるば椎量ちるもやさうませりつとも夫
いるうる気の悩う。殿のちん大るるよ居ちんせど。最期の供よ後ちくハ。ハ涙も
るる越度なれど。忠義の志ハ人みも猶見。浪くい身のちれるるく。貪ハ
ちしよ者うくと。石碑建立の金ちのくて。歌詩の連判よ加ちえが身の

積びし工夫工面のなきあちら。舅の仇人。定九郎と撃とめしを。しらねば卸て化と
なかり。しかうの逐吞もれつまりぐ。まだ三十になるやならずに。腹をきらせたまんぬ
ふりなされし。神仏もうらめしく。まだ親与一兵衛さまハ。百姓でこそあれ。頼
もしい人でありし。一人の女児を売てまで。婿に忠義をさせなんと年寄の
夜行を厭わず。金をのくて帰る道なく。定九郎が刄にかかり。そちが身とぞ
由夫の為に操を捨てく花街の勤め年季の明るをまつつらひなく。親
夫の精進日も。しらぬにいつかせなのふしんぞ天道さまも情がなし。しかれば
忠義ハ身の仇なく。貞女烈女ハ神仏に憎まれるのみやあらんありのまく
なかるべし。この色欲の國に生まれて。浮気にいつかぬ一生の得すとヤース
ものにおもふぞや。この惑ひのたまをまうに。療治なされて下さりませと
まづむじめからむずかしい。容躰つけする幸気病。夢想兵衛ハ快く
咲て。几を礙とうちぐるる程どこ是ハむづかしい。世に淫気なる。娘子どもや。
性のわるい息子なのどが。うつくと尽しなかがらも。六段目のしんばつま
になりては。ござしが身の悪いことをしらいあうる故に。療治もしよけれ
ど。さあり愚癡に凝かたまつては。療治に手間がいる。是も彼縦度
の脱さ。息子や娘が。己惚鏡を見ると違ふて。生忠臣と生貞女の己惚は。
熱に小才覚があるものゆゑに。人のしらぬ難病じやが。良薬があるぞよ。しそ
進ぜう。そのりじが給事しめされし。塩谷の奥方めわよ顔世御前が。師直
を恥しめのひしと。そのりじが身を責て。夫の為じやといひめされど
ちもうどおもふど病症で。これも是女賢しくて牛責をとるのといふの
ぢや。そのせいといふが。師直が横恋慕。これや毒を食らば皿までねぶるといふ人外な
不養生なうう論なるものでもあらん。むえづ分別すれど。出既第一の奸佞邪智ハ雖

きてゐるのもの。殊さら直義朝臣を餐應司の師範なれば。敬して遠離るふ
ちくハ。こころ紙女の鼻の先ゐて。日もあるべきよ。餐應の當日。場所とも憚
かるべ。女を使ふ立て。夫の手わら小夜衣の短冊を贈らせ。恥はらを
かせ。こころべ。已後をしるべであらんとハ。悉皆気のちがつ。穿鑿
るのちどや。ちのこるのちど。當坐ふ師直ぶ艶書を投えしめ。ちる。
禦角なところふ似ど。ちりや十戒の古歌なりとも。夫ふ告げて。師直ふ
贈るハ不義なり。礼ふ男女ハ。こづらう授受どとハ紙。ちくふぬ有の
悋なり。又判官どのも判官どの。奥方ふ恋まるされる。何のるとも問ひさぶめど。
妻があげくくまとたく。ホーホーるどて。女箱をそのまふ。執夏へ遍与
められこのろさこれふハ一向論外なり。ちるれば塩谷どの紙数せ。又ハ小夜
衣の短冊のちどや。恋ど気ちるい亭主ふ腹の立ちるる紙ちりせど。

女の才ハちらるのりるのんぶ正直なぶらんとて。かりひべ。けんざり夫の腹を
くくくとちりつ。真直ふいてのけ。気を立て人と聞諍さを禍を惹
出ち紙貞女といいちど。ち人子の為ふ隠し。子ハ父のためふ隠ちとも。正直
ハその中ふあり。ちりをべ為ふ前ちち。真の貞女といひがたし。況て
そのじの大膳学款さいふ主命なれば。孫舎所の表門へ夜の
うちちり推参し。供ふつをさ下部ふ鼻薬を餌めて。早野氏と密
會ひ。ちり推びふ刃ぐりて。主の囚徒とるれし紙ちふど。喧嘩ふての
捧ちぶり赤伴内と挑ちあハて。主君の罪をす。夜あけぬうちふとちべ
ちち矢蕩。ちる而もるん不忠不義の人ちるまど。憤て殴るふ憚ることと
るけをが。大星氏のるぶくの。大年紙推量し。夜討の人数ふ加りるんと
希りをハとりやちりるうてハるのハぬ答。その本拵の長ふ立ちくつて変。

ちゝぶ〻と男の仇人定九郎を撃ころうんと。猪ぎやと云て逃
を搦捕て。びくりして某ハるんうと。死人の懐へ手をさし入て。財布を
綱で竟かと。俄頃よ紙のろうそくの賊ゑ。をゝ〻定九郎よ者らば。
腹いたられみ。なぜといひのく。畢竟二ッ玉で撃こあるゝ。男の仇人みて。金
ハ女房賣る金るんがとそうけきこてでハ一向そのそハもれど。金く鉄炮
の玉が前翔て。旅人を殺し報せ。と云ひるゞ。完初の周章ようて変て。
竊よ欲び。不義の財をりく。慎の功名よせんと云ひ。そのゑ手汚れ
しう。聖人ハ渇ちても。盜泉を飲ず。賢者ハ瓜田よ履を入ず。鷲ハ死し
ても穂いつまゞと。世ようゝ人ま丁。早野氏も人の枉死を幸ひよ志を移を
とゝハ前の発も虚文るう。発を取るるゝ沢鉄て。切どり強盜ハ武士の
るのよひ生やるのゞとあるを。義理よくとろちぶげよりとろふも稀みて

あるて。公儀とて口実を。嘆くも傷痛けまゞ。この理を説ず。夫貪ハ士の
常るう。武士ハ食ゞと高養歯。といハ誠ハあれど。切どり強盜ても大る
るんとハ何の代よゆるされ。甚し紀恨るう。廉士ハ遺金をめくうんゞ。
ちれば早野氏の大死ハ鉄よ生く汝よ返る。天理るんば。神仏ハ中よるべゞ。
竹田出雲も恨るとるう。之然ハ刃を倒るの病ひ。不義の財ハ命を縮
る毒茶るるう。死曙りのくう。これ日本。曽我物語を読て。疑ひ云人と
あり。曽我兄弟ハ純孝の勇士るう。結成時致幼稚と紀よう。又の仇人
祐経を討んと云ハ志穂ゝゞ。十八年が間百折千磨の艱苦ハ例ゞ。
祐成ハ大磯の郭ゞひしゝ。狂女虎と相欲び時致ゝ化粧坂るのゝ丸ゝと
契り浅ゝらぶというう。仇を拉殺んと云人るの。假初ハ色慾よ志を
移ゝとゝ紀ゝ。真の孝子よあらゞ。つゝく曽我兄弟の人とるうと考るよ

色を好む人よあらじ。然れば大星氏の祇園町あく性び誠まてしどく。仇人
よ公故さもん計畧ろうべけまど。帰いるくの性女のようねば。人をまるの
才ありて君が一夜の情ゆへ。妾が百年の命も惜めふじとて。結成が為
よ尾とろうり。さて吾光寺へ赴たるうべし。これらの義理をよくも考
ど。世よ君又の仇を寃ふりの。動もとれば色慾よ志を殺とりの説
あり。ゆゆ幸意を遂るとも。ゆくてハ玉よ瑕あるがごく。れ恨むべし。さて
亦そりどの仇敵又与一兵衛どのハ。百姓ゆハ又あげさ人物。ろうとひとり
の娘を賣ても。腎よ忠義を立させんと。彼親又どのハろハるとも母
ごゆもうく泣ゆせんしさ。去るべうら。女ゆハ三従の道あり。家よゆろてハ又ろう
従ひ人よ適てハ夫よ従ひ夫死してハ子よ従ハ是所謂三従なり。そゆど
い既よ堪辛といふ夫あり。その別深ハ又母よ告ど。閨隙を攢牆を踰る



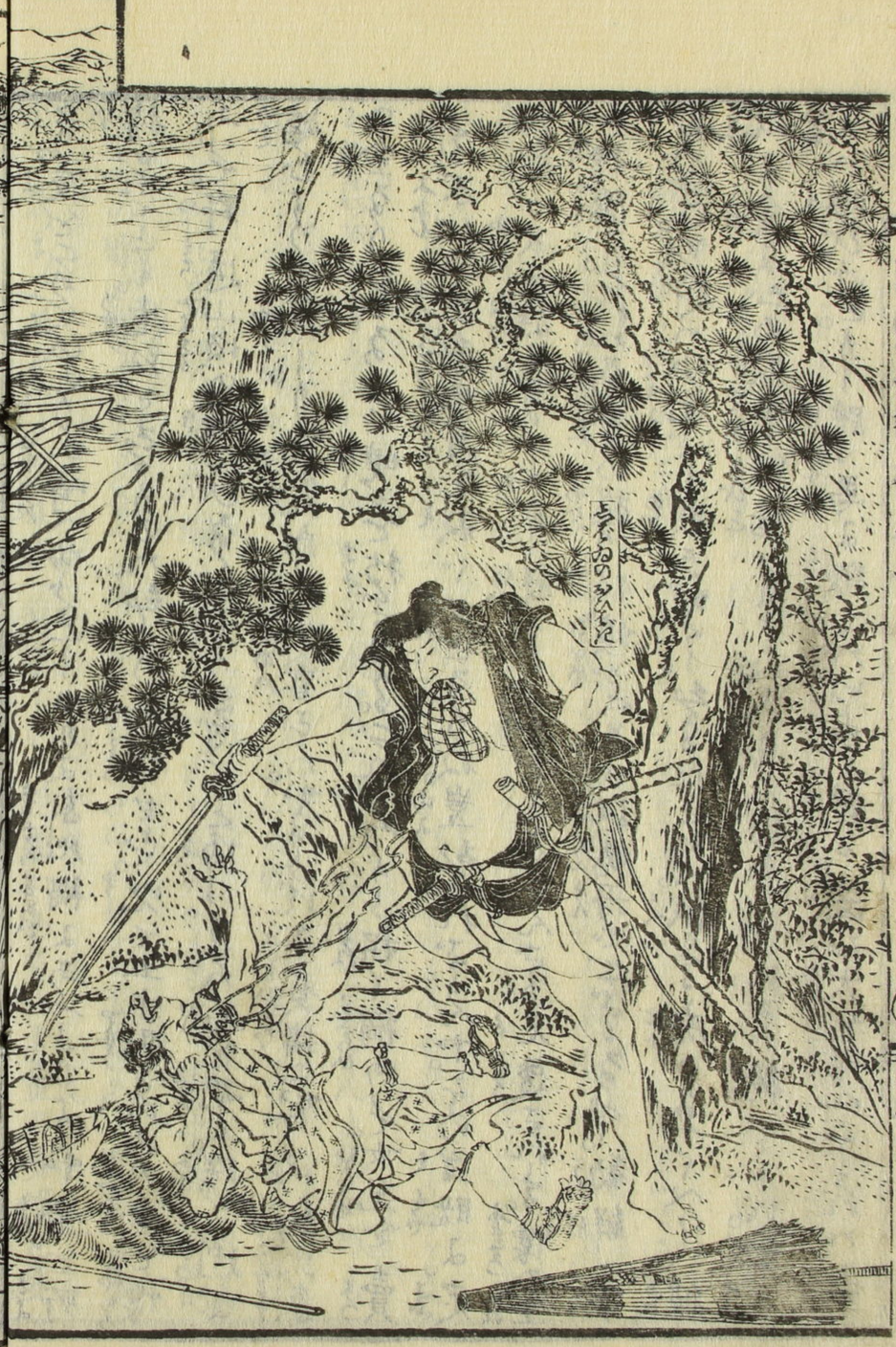
摶び合ろうとも。又母を見欺許して妻しられば。ろうしく夫よ従ふべし。ゆうるよ
身賣のうり紙。夫よ終命てハ。納泣さ母ゆ。深く匿し。親子を
人内談ろう極めハ。真実ゆ似る不実ろう。畢竟一文字屋才兵衛よ。伴
ろう出合うら。ゆうく夫が立久つられば。そうけまと告ど。て走るとれハ。身をうが
ゆうよとるの罪脱まど。これらハ義理よてれ惑ひゆく。匿しそうれとあり。あれを
あり。人ゆ醋とそまて。とれうぶ家よるんをあるゆ。しそ。隣で貫ふてその人よ遣るゆう
るのゆあそ正直實儀といふものあハあるど。凡忠孝信義の為よ子を賣妻を賣
りのハ曾女が教よ逐ていとれうぶ子と捨て婚の子を伴ひ。易牙がその子を羹美ま
あそ。極公ようめと同日の苦節ゆそ。背を名聞を好むの惑ひそろ。つうぶ子と
妨の子といづまろ親一紀至親を捨るハ人情よあらど。況て不子を殺して。媚を
主君よ求るのハ虎狼ようあそろ。彼その子を愛せまど。辛う我よ忍をゆもん。

されば腎の孝子を賣るとなれば。腎は義ありといへども。子の孝なれば不慈の駆るの。君の孝は妻を賣とれば。君は忠ありといふとも。妻の孝なれば不仁の夫なり。門を解て薪とし。井を塞で臼とするなり。一旦その用を足るといへども。あらぬ。夫忠臣は孝子の門より出ず。烈女は清廉の家より適。男將の下は弱卒なり。仁義の鄉は盗賊なし。子は慈なるの孝なれば。真の義士あらば。夫婦の礼なるの孝なれば。真の忠臣あらば。この世ふて積悪のものも。老てやうやくその悪紙覚るとなれば。金銭をもて閻魔の廳の。帳面を消ぜんとなり。或は布施し。或は堂塔を建立し。手の内を入て仏を媚て。未来の罪紙買んとなり。もの也徒なり。されとは愚癡の至り。早野氏が百両の金ぞ調進せば。以前の過奇の罪を贖ふ。足りるべんと。名は迂也。大ならずしらの了簡なるべし。されば義理とそうちがへめさんとなり。よ一呉湯どのへ。祇園町ふなく。五十金の身價を受



そう。夜をこめて。ひとり山崎へゆく是。ゆや金を所持せどとも。危地を去るものは。もとり夜行せど。況て五十両とは。大金を懐あり。野道山坂の嫌なひるく。ひとりゑくとゆくは。石を抱て。深き淵の臨むとも危し。定九郎は出會ぞ。かるのふぐ平員猪はかくぐ。幾次急の金なりとも。ゑどて曝るを待ぞりる。されどうう拐て。禍なりて。女児を賣る不仁の金。忽地分を殺ぐ。又とるるぬ。豈あれざるんや。その分既は。定九郎が又は縫見るのぐっり。脱ぐるりやとく。ぐんざる足透される。懐の金を押隠し。これは昼食の握り仮。娘がくまを返魂丹でぞるるぞ。勸解しるあろうさ。ゆくとは小児ども欺さぶて。ゆるれとなれば。鐵しる虎もるづくべし。彼既は金は公あり。爭賠話をきくべき。馬の怒まるとなれば。騎べうべ。蠱合犬は吼びぐ。り跨る馬は鞭べ。いよく跨る。蠱む犬を吼んとなれば。却

ひとりごとをぶく
大ぶるまいをぶく
おやう
古れいをぶく
今戸をぶく


ちくぜんのをぶく

手を傷る。憲あるりめ。これと近つくど。昔漢朝の陳平が楚ようゆて。僕
よ仕んとせーと。楚の兵よ追まんうとく。殊さらよ道を急ぐ。夜野渡り
さーかりて。船を借り向へうさんとせよ。二人の渡守い強盗あく。この夜網を
張て。よ死多もがのと待ちるれば。陳平が舵を借んといふを。竊よ飲びとろ
よく祭せく。中流へ漕出ー。矢庭よ殺さんとる気色を。陳平ちあ猜しく。
二人の渡守よ対ひ。これも幼きとろ。水濆よありしうば。舵を漕て紙うくとるり。
おのくまづ休まるく。おのれうりそ漕べーといひもあくど。衣服を脱で赤裸よ
ろり。ぢて舵を漕ーうば。盗賊多るいらの形容をうくさそうありめ。懐よ金い
るうう死。ものもうり死奴を殺ーて何うい せんとく。忽地よ手うう死絶終よ向ふの
岸へ送りー行よ陳平い九死を出く。一生を保ち。衣服を舵よ捨ち死て。岸へ
跳り上りさまぐの辛苦ちれど。遂よ漢の高祖よ仕く官位左丞相よまで

徒のぐりぬ。亦宗祇法師が行脚せーしに。ある山路を越るよ。盗賊あり。宗祇
が髯のうりぐをうくく。生髯いられ金ろり。前て賣ぢやとろひて。林の中うり
きり出。右ゆよ刈とり提。左ゆよ宗祇を投て。既よ髯を剪さらんとし
とれよ。宗祇い騒ぎるけ死るり。つうる為よ箒の髯いはりせし。壁の
うれ世を捨ちるまぐと孫よられば。盗賊大ひ死よ甘心ー。故て林の中へ
入りといひ伴くうる。彼陳平が赤裸よりて。物ろれと示ー。賊の承ち死絶
左へ隠機意変の妙計ろり。又宗祇が狂歌を詠じて。賊難を脱ーい庵
ろの盗賊ー歌をちうぐい。吹ーて放まぐうば。宗門関非心非仏の頌ふも。
詩人よ遇ぐい獻ぐるとるれとあり。詩をちうぬ人よ。詩を贈るい大ひるもぐ。
宗祇がろい寓言ろのうん。されば陳平が才をりてとうう。賊よあいて。衣服を
失へり。況てその餘の凡人い物と命と。両ろぐ全るとい死ぬんやり。山中よ賊

と出のいてとびぶ勇。彼と勝でくへ。それ武士たるもの。男。彼と劣がてへ。速と物を与へて命を保とそこそ。り物と愛惜をるとれへ。物を失へのみ。ど。命も又とるる。大と憤れるのへ。辟小と恥とをるべ。ど。もれば与一兵衛どの〜枉死をめされる。自業自得るるうるるど。天道さまがゆんぬ角るれ〜るとく。神仏さでを恨そのへべるべ。その場と去るど。仇人定め郎を撃ちとせるひ〜へ。天道さまと如方へるる〜。五分でも透ぬ。さてそでめもいへと通う。そりが夫と吾ど〜。身を賣らんとそひつめ〜へ。ゆるちぐふもせよ。夫の為とあまべ。めるさる不もへんが。當時早野氏へ入聟なり。年老ひ〜両親へ孝親のるへるど。只管と身を賣んと希ひ〜へ。不孝のへの不孝こ。さればみや。兄貴平右エ門が。祇園町みそ。邸よめぐり会釈と夫の横死せ〜死告〜るとれ。さてめ与一兵衛どのくるる祇園へ。

うち驚とだるり。堪平ハ腹切て死どへ。ま〜やいるの仁。俄頃とそうつめて。をと〜死んとたり。釈と夫と。その恩愛ひまとうあり。腹ハとんるる。その日愁傷のよまいどふも。釈夫の精進さへ。ちぬるとて。が不孝の罪とへ。せめくへのこ。これへ殊勝と吹ゆまと。ぎその口の乾るや。ひぬと。物体なんがそそんへ。非業な死でもお年のへ。堪平どのへ三十とるのやるのるどと死ねるとへ。さで。朽をそうくでどんせうとへ。不孝千万るの口上るるどや。かく。ぎで間ちぐつさて簡ゆるる。祇園町でへ一夜のうちふ二度月が出ちるるるせうふ月ろ〜るのぜといへ。力弥が寄るとる。入る月の山科ろりへ一里半とあれば。月が入り果とべるのいう。その後九太夫が。縁のりる〜文とうもとる。月新と透〜るのるるとあれば一晩と月が二度生ねば月新へ透〜るのめるまるど。りたべめへ雲がれ〜と月るへば。雲と入る月とたるる〜んりのべれそとの

かくもむくゝかく不孝なる貞女といふものハなり。親と夫の恩愛と天秤をかけあハせられべ。その天秤が折れるとも。姪重ハるんりのゝ〻やう釈迦年ようゝまゝつれば。非業なる死をなされても。是非がなし。夫ハまゝ年ようゝ接切て死なべ。その悲しさも一倍なりとハいへどもそのゝ〻せゝ時でも。人ハ笑せられぬ口上なるべし。全体夫の為なりとも既に殺の客に身を汚しそ。年季が明ゝらば又四の夫とひとつよりふとゝびゝハ。恋慾うゝ出ゝて簡ちがひあゝ女の心操を正くなる。道理をまゝぬ誤なり。おゝてのなげゝ。金翠入金傳といふ小説に翠翹といふ箱入娘が金氏の息子と。夫婦のかゝふひまゝられとあいまゝ婚姻ハそのくゝどゝ。そのうちに釈又が身に係ゝ不憲なるゝが起つて囚徒となりしゝば。親を救ん為に己を死ゝどゝ翠翹が身を賣て。その罪を贖ひゝが既に殺の人ゝ身を汚されゝゝば結髪の夫に恥て後あゝ尼となり。妹をとりて彼金郎に妻さるゝハ道理至極の始末なり。是さへ一旦賊首の妻となりしゝ身のよ寛を報ひゝるのどハ。女子の才覚にるべきゝ。ゝまてゝよゝゝ論なゝとゝハ。徒早呼氏が悪るゝて世よありとも。恥をまゝハ年季あけて後に尼となるゝんあハ。貞を破て貞を金もとゝいへべ。年季あけゝゝば又舊のごとく。夫婦になるゝんとゝるひゝハ。慾の爾がぬけぬ故の惑ひなりし二人川の上に立て一人溺るゝとゝも救ふべ。二人ゝりゝとも溺るゝとゝハ救ひ難し。一人溺るゝと紙ハ一人岸にあり。紙ハ救ふに便あり。二人とゝも溺るゝとゝハ。二人水中にあり。紙ハ救ひ難し。夫婦ハ釈又なゝ。こゝな色慾名利に溺るゝ者多し。夫ハ妻を救ふに便なゝ。妻ハ夫を救ふに便なゝ。親ハ子を救ふに便なゝ。ゝるゝとゝもそゝ鶏の嘴なゝど齟齬。その根本ハ。そのゝがいとゝ起つれば。罪障なるべ消滅せざゝ。この色慾関〻ゝ

まつハ。自然の悪報あるがあるを悟らずして。天道ハ義士や貞女を憎みたまふ
かとて。恨をふくむハ物体なし。その道理を弁まへて。第一に己が徳を慎み。
よるべなき身の非をさとりて工夫せバ。これにまさる保養ハなし。ひと孝子の
雲をはるゝが如く。順風あらん。椿茶ハ。唐の鄭氏が女孝経に見えし。
許熙載が女教四巻でありて。服用すべし。と説諭すれバ。おのが顔を
赧めつゝ退きぬ。二番ハ十六七の人がらのよき娘。年に似あハぬ茶筌髪して。
結髪の夫に後れてやうやう。これハめづらしき後家なり。それが母親と見えし
て。四十あまりの。都風俗いまだぬけきらぬ。色ありげなる寡婦と見えて。髪の結ひ
なりいと賤しげなり。件の二人。おのれが前へ居よりしが。娘ハ恥かしげに。つくづく
容貌をいひけるを。母親が代りて。これなるハ私が娘。親の為夫の為。家。
霊仏霊地を拝みまはり。拝ませんとて思ひ立ち。熟ぬ旅寝に日数経て。



大和路めぐりてありしとも。おのれどのと名告あひ。道づれとなりて行きしが。
紀の路の浦の野合船。暴風にあふて吹ながされ。それがさまざまの憂苦
労。御推量なされませ。此者が身の上のことなれど。この娘ハ夫幸蔵
ハ。桃井家の忠臣。娘が夫ハ大星力弥。唐山の晋の豫讓紀が朝の由
良之助なりと。日本と唐とにたつた一人の親をもちし。力弥が妻となりしかバ。
女御后妃に備るよりも。女に稀なる娘が手柄。他ならぬ家なくて去られ
ても夫の家にて死しが本望と。命をすてぬ貞女なり。今時の娘なれど。
めづらしきことなく。世の人もすげなきことハとてもなきねなりかうしてよろ
とおもへバ。とにかく。身もよもあらぬ絶体絶命。娘が婚姻そのへんの
ことが身もあまると覚え。極楽をいひけれど本望が。命を捨てゝしまふと。
その日の事も叶ふまじけれど。せめても末なぐさめとせめて。世を別れの新枕

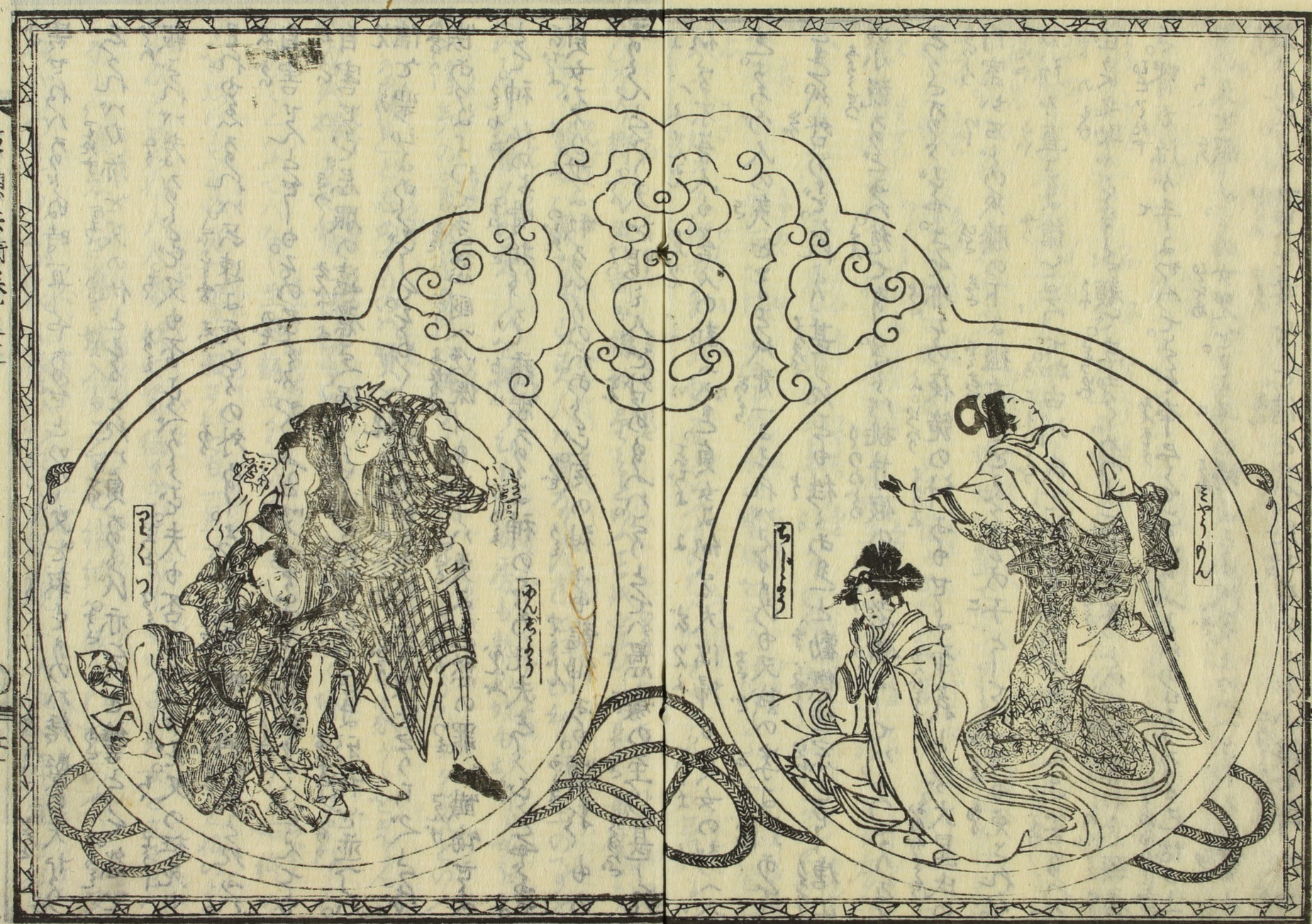
それも承知のうへなれど。二十よ足ぬ娘小浪よ。後家をそさて親夫の。
菩提を吊ん。吊せんとて。旅をうゑも勢よ。捨てうゑ世よ存余てを慾
國へ伶俜とゐ目盲よ境の門ちがひ。それをうくば負女わど。形ゐんりのゐ匠。
ゐ國の娘子どもがまご年もゆゐぬうち。いとづゝのものゑしてうくで有得
ゐ家うゝ縹致を孚ゝれ。そのまゝゐ支度金をうゝ。その身の采花を
いよよ及べど後みゐ釈まで。うゝて。左團でゝさるも。世ゐゐ往くゐる
るゝひど。天道誠を照ゝ。まつ。依估見員ハるゝれぬ答。とゐくハ
うゝ気も微ど。ゝ気の茱もあるゝゐ。調合るゝれてゐうませと。
ちとゝうよ物うれべ。小浪もうよ手をつゝ。世ゐ前の寶よゐ。そゝうよう
ゝ後家よるゝゐ。稼て受人ゐのうくゐれど。ゝゝが爲よ殿ゐとゐゐ力孫
ゝゝ外ゐゐ。國へゐうてゝゝゝよ。そうゐゐ訳があらゐとも。外の



男をゝうゝゝハゝゝ。ゝゝひつゐ。一生後家でゝゝとの代楽んで居ゝゝ
よ。ゐも夫いよ色慾國へ吹流ゝのひゝゐ。風の神もゐゝう胴慾世よ負女
とゐゐゐゐ龍神や風の神の情ゝゝゝるゐとゐ訳と。実て惑ひがゝれるゝ
るゝ。療治るゝれゝくゝゝゝ。ゝの病ゝゝゐけゝゐも。夫とゐゐゝゝゐハ一
ゐゝゝちゐひのゐいゐよ。ゝゝゝるゐ口のうち。谷の戸あけて咲るの枯木
よ宿ゝ風情のゝ。夢想兵衛うち笑ゝ。ゝゝゝゝの病症も。ゝの病
の困ゝゝのゝゝ。狂又加古川氏のゐゐゐ。いゝゝゝゝんゐある症ゐゝゝが
ゐれゝゝゝゝ人ゐゝ。ゐれゐゐゐれゐゐの病症をゐゐゐ。
負女ゝゝと自誇ゝゐゝゝゝ。ゝゝが結髪の夫でゐゝゝ。婚姻ゐゝ結ゐね
よ。女子のゐゐゝゝゝゐゝ。淫婦とゐゐゐゐ。既よ桃井殿の屋
敷ゐゝ。饗應司のゐよゐ力孫が使者よゐゝゝゝゝれゐ自分甚

しらくをぬかしおつてゐるすべけ。めそつと力弥が長坐しそうけ合
の支度でも出るならば膳もそえうね。ずいぶん為倖。是ハそれどのこゝろでも
なにし一倖親子ちの縁がそでなりしゆゑ。縦内縁あればとて。大切なる主
用に女子を取次に出し。口上の間ちがひあつてハといふ所かへ気もつかず。
礼節といふものハ。家かぎりもしられうとハ。如何なる誤もござるまい。その
了簡ちがひから。しやかむに娘が婚姻を整てやりしとて。山科へ付ての
推参嫁入り。塩谷殿を抱ゑあげし恨があれバ。大星氏の不義をしりて
理の当然。そこを推して本蔵どのハ。主君に身の暇を請うけ。女房子
どものもしらさずと。虚無僧に出立て。死よりの後り力弥に殺されて。刑屍
を抱ゑある帳面を消させ。その夜の婚姻をさす積が。あふとハ悉皆狂
人の仕体なり。縦令義士鏡銭などといふものハ。人情をうち出して。善人す

似たる不善人も。善人の部へ入れ。貞女に似たる大悪婦も。貞女の部へ入
れ。よろづ人の気をまよはす事ハ。身一にされバいかなるものも文銭の字にうしなひて。
ことに作者めども。これより甚しきハ。王も挫きあれど。勧懲を宗とせし唐山
の小説などにハ絶てなし。さらバ桃井殿の家老職にしてハふつゝかなる
しかたなりとぞや。さて亦その夜婚の計にもせよ。本蔵どのが大星氏の
内室。お石どのハ膝の下に細布をしく。その子としてハ。一寸も免されぞ。
力弥が直さま槍をとつて。加古川氏を刺ころしハ。いかにもあるべき事なれど。
由良之助がしらずして顔で立出し。めづらしや本蔵どの。御計略の念願届
き。聟力弥が手にかゝつて。さぞ本望でござらふと。あまつさへ己惚口上
その父を殺して。その女児を己が子の婦にするハ。義といふべきや。その聟に
殺されて。己が女児を妻とするを信といふべきや。さてまた小波女郎ハ。自


ちくりん
ちくつ
ゆんちくつ

害せねばならぬ時、豆ゝや。なるぞといふべ。又を教えるものハ結髪の夫なり。
もしこれが力弥と。又の仇とならとれハ。貞女なるべし。亦これを讐とせん。然と
報ずれば孝なるべし。又も否とせべしとも。夫も否とせべしとも。又の枉死も
なられば。忘れるべし。只速よ死さるの外なし。もしよ。婚姻の縁ハ。
自害せんとせしも。その早くぶかるべと。釈の教ゆ。をんなも
自害せざる。忌服の遠慮さへ。得ざるべし。その夜とぐさ。彩花を並べん。
偽を楽しみあらざるべし。そもく何ぞや。かくさべ義理とそうちべく。
悔あるようて。を慈母へ呼儒ーハ。更よを慈の罪を懺悔せよ
とて。神仏のお骨折ゆ。慈悲なるよ。神のごろ凡夫ちべとなるべ。
貞女なるの。世よ形なるものあらざる。風の神ゆ。龍神ゆ。憎ものの
なるんとなく。天を恨ん。人を怨めるハ。とそハ愚癡の至り。甚しき

遂ひるの。郷ゆも田舎前が。漂致早ゝとゝ沢宣ひーが。ゝハ毎度ヤス
るるなく。賢女ハ美なるべ。美人ハ賢なるべ。一生のるを
ゝゝべ。顔をの美ーんを擇ゆむものハ。女房も熟の妓も。なるべ。ゆうよ
ゝゝ。浮気の食なるをるんが論なり。されべとく。累のゆうる女がよんとハ
でハるのけをと。志めるものハ。賢を擇べ。顔きを擇べ。家ぐーをそんべ。
強ある式擇ゆべ。婿を擇もんよゆるべ。本義どの婿をそゆれしハ。
男であることハ。至極統あるよ似れど。名聞と好むゆう。始終の
るをゝべ。その身ハ婿よ教されても。一旦ゝる結んべ縁の糸をねいゝ
ゝもんとゝられしハ。人参欲で前縊るべ。女児よ貞女をさせん
とるべ。推ゝことざるる嫁入もさせべ。結納を返されとハ。ゝるも安
えねば。いつまでもゝるが家よ養ひおれて。大星親子が。仇人師直を殺

しかして。腹さりて後ハ。小波女郎を尼にして登せ。一生不犯の比丘尼となさ
バ。菩提なるよしで婚姻を。その結バせらふハやうさ親の慈悲なり。ぞうじや
そろくす了簡か。臍の下へおちつきたまひし。と問ひながら扇をひらいて胸
うちあふげバ。おくるハさらに。戸南瀬小波も。忽地迷ひの雲霽て恥
しいやら悲しいやら。この日ひごろ来まれくが。始終のてま承知しつる人が。世にも
稀なる貞女しちじや。義理が詰てあれまじかと。いかさま己惚して。
げなもさうかとおれかまして。神仏を恨みしハ。義理しらぬ了簡
ちがひ。お療治を受まして。夢の覚るやうにおぼえます。面目次第も
ございませぬと。感涙袖を絞るなぞ。夢想兵衛ハ莞爾として。さも
あらん。さもあらん。おが非に気つきたらバ本復せんと疑ひなしといひお
かる。港口のかたより。戸南瀬が従者。息もきるく走り来て戸南瀬

母子とおわれを喜びよそ。船頭どもが出づくと。此日破船を修覆て。順風
をまつと吹しがあかりいふ風かはさとなりん。今纜をとくとのを舩か出るのふ。
何してござる。一千日もたゝぬ日本へ。久らしゐふねかとまのかれて。夢想兵衛
が療治の効験。是ほどまでに利くものかと。三人の女子ハ嬉しさあまりつ
て礼をいふやら拝むやら。暇乞さそくに。従者にひつさ一散に港の
かたへ走り去りく。されバこの日群集の男女ハ。おくるゝ小波ホが病症を遂一
きゝてく歎息し。この国でハ氏神のやうにおもふ。お染久松。三勝半七ホがこと
夕霧伊左衛門が不訳。梅川忠兵衛が道行などさへ。さらしく道理
とハおもふものなく。憐なることやと感に堪しよ。それよりぐつとさがりて。そこ
ま引くかのものも貞女烈女と思よる。おくる女郎や。小波ホ祭の身の
上も。醉砕してよく吹バ。義理に稀ぬる身し。況て仏とも法とも

ちくぬ吾們。を慾をあるつりとして。恥をちよねバ人みして人の数ふも
入りがと。那くいあるくと。療治を受て恵の病の根を断てるあるべ。
世五の暁を一形とする定業も。世間ろのそよ五六十ぢぐ。生延るるも
あるべし。有がを号とをとく。無名数兵衛を伏拝を。隨喜渇仰の声
耳よ備。ちぐいハ鳴も止ぐれば。無名数兵衛ハ鼻高くとひとつせろ〳〵
ぢ。ろれ少年翻みくハ。紙衣の上よ。あ。茅ろ乙よ任せざりし。不
教為みくろの格よ。よ〳〵教到ちるるるバ。天晴孝行者の人物ふも劣
らぬぢるよ。べるしよ。さて〳〵残念千萬と。をを聖人ふも。るりちきし
るるちして。坐中を佶と見ちハ世ば。忽地二十だるる大男人情屋
利口義と名告て。もろハ俵巻諸肌脱ぎ。手ふハ白刃を引提群集
の中よる跳り出く。義兵衛と聘つけ。ろの生毛唐人奴さまぐるる



詔詐と吐て人を惑ちるハ。古今ぢ双の癖者るるりハ。ふ。ぐ。
世界の男女。悉貞実廉直の人とるるべ。第一千日の狂言ぶ紡ぐ。
ぶるも老るるて。楽るも哀るる。旁るべ。抑ろの國ハ閑閑よるるる
を。慾を宗とする方よ。衣服も新しをるる。紅白彩も他國よる駁
賣を。ろの隈を蒙るるのぶるるる。ざるよるて一生後家をるるる
るけを。ハ親孝の厄ぬよるるるる。娘子ぞも。ひとるで挿ぐるる。
犯の贈を嚼るるのもるる。恥をちるるれば。恥ぬるる。貞女るるけを。ハ淫
婦と名つるるよるもる。夫名の名とをくさい常の名よあるる。道ろ
道とをくるる。常の道よあるる。畢竟仁義の。忠孝のと名をつけるる
ハ。聖人の私ふる。天ハ。ものづるる高く。地ハものづるる低く。をとふるるの世
ふるるハ。祖を左よあるる。髪ふるるの也。ふ。ようを。慾國の人るれ

びとて兄弟ごち夫婦とすくるものもるる。男色ハ倫外の交りるまどこ。こまこ禁ドがビ。こ情あれバ是常あり。地獄あまこバ極楽もあり。柳ハ緑花ハ紅のいろ〳〵。春来りて開ざる花もるる。時来りて情の動ごる男女ハあらざ。鳥の春媾合ハ。陽と感じて。その萠と草木と共ふ。ちて紙めく。ちるの羽ハ木の紫この象る。猫の正月ハ媾合ハ。時のたゞめと感ずる。ちて紙りて。猫の睛ハ。十二時を離ざべ。春女ハ陽気と感じて男をそ。秋士ハ陰気を感じて女をそ。鹿の秋媾合ハ。陰気を感ずる。水鳥の夏媾合ハ陽気を感ずるなり。扉交まバ。月と暈あり。陽の陰を抱ふ。兎その牡を慈まバ必ず孕む。その気を感ずる。夫陽ハひとりゆるざ。陰ハひとりゆるざ。陰陽合散ちて。四時移ざるとなり。春ハいとさ〳〵。夏ハ猛く。秋ハ悲く。冬ハ



良と。天と四時あまこバ。人と喜怒哀楽あり。されバ人の心を和るハ。まこ。ちるハ。釋氏ハりつとも色慾を禁む。その人情と反るゆえと。和尚もるる母色中の餓鬼のごと。流る水ハ腐るとも。色慾ハ禁めがビ。妻子ハ衣服のごと。衣食足て礼節をまるとあるとも。礼壌酷しけまバ。人和せざビ。礼ハ親こをつくを所以とあるごと。家格一ツで貫くこと女房ちるとそ。一生をひそげざるあハあるごと。十荷廿荷の嫁入道具と。四五日まくうち運ーとも。一年とをひそげね夫婦もあり。且有用ハ学角の中とあるもの尾ハ飛バと用る。まるれども。鳥の尾を剪とるハ。遠く汐飛ざ。人の手ハ物と用る。まつまども。人の手を縛るとるハ。速く汐走ざ。されとりてそれを見まバ目前の理ハ九外の理とまるざ。有用の用ハ。学角の用とまるビ。古ハ来るるれども。脱ビ。歯ハ堅けまども。脱易ーり。歯の脱

易と憎む。舌のごとくなれども、やはり歯の用をなさず。歯、舌の用をなさず。各
仏なる所のて。歌舞戯の奇異戯の世界あり。是慾國なり。是慾國乃
世界あり。おぬしが有用の辯をなすべ。乃用を捨ておぬしが目前乃
理を推て。ひぶ理外の理紙折んとなるは。舌をなして物を噛む。歯をなして
水をたらんとなるが如し。されつゝ。おぬしが為体をなるよ。齢四十よ
及で妻もなく。年は豊なれども。肚餓さうなる面つれなく。世は暖
なれども。寒さうなるあり。父母の國より来りをなれるねて。たらはきり
まで。まごつれあるれ。養歯で痛しこの隅とをなげるやうなる。ちひさん。
陝い。偏徹枯る理屈いなれば。とて。維がそれをよく咬べれ。この國よりも。
なるべるかつるく。ぶんつかはのとなるくなるよあるなど。僅よ九五の曉を一
刻となる夜よ。遂よ悔を改るよ至らなど。顔回も長生なば。聖人となるべ。

孔明も上壽を保ば。王となるべし。蜉蝣も朝よ生まれ夕よ死ぬ。蝴
蝶よまことあるん。槿花も七日衰む。樗よまことなるあるん。是慾國
の男女も。五六十まで世よあるべ。おぬしが教をまことなる。賢人貴女
となるべし。人の悪い咎めをなくなるべ。言は行ひ。是いまだ信ぜられを
なるべ。是を練なるとれば。孰ろ識となりはべん。頤とるれば。舌を弄ば
細首うらもとなるんと。罵る声雷のごと。又を閃しつ。跳り蒐て。
凡を碾と砕きば。その勢ひよ辟易し。群集の男女は慌つ。ぶつ。
東西へ散乱し。次の日より。絶て一人も。夢想兵衛が療治を請よ来る
あるなけ。是ばこのよまでい。懇よ歓待する。旅宿のあるじも。こうい。て
まで一七日もなるべ。のくとなるべおるる。戸南頼ホよ侵船し。七日ホ本へ
べるしよと後悔をなるよ。ざれば。ひるく旅宿を立出。港口の方

へ赴くゝよ繁ぎ捨てる漁私めりたてよ至て養却兵閑い忽地曉て横千
を拘る慾よのゝ身を宴をの眼ふと。物ふるめのるのどい養ふもてんけ
ど。ふるよ今たてりども一艘の漁船あつて主ふれい彼浦嶋傳人ど。
强飲貪婪の二國へい私とめて送りまべゝと寳ひゝい芒ふのビ。さうびやゝと
ひとり点灯閃りと著て。鏡を解とひてゝ。不必議や四方真闇よるつて。
浦風颯と吹来り。私を忽地澳へ吐ゝて走りふると箭よりもはやく。
千里もくゝ。万里もくゝめつゝむせうよ吹流さるゝと。一昼夜みて。
彼風たゝめて軟ぎゝ。酒の匂ひ芳さと。鼻の邊を通り筋。强飲國の
大湊。底抜の浦よ着よゝ。

總評

道よ達ふるものゝ。道よりも教。情よ通ぶるものゝ。情をもつて説く。

公道人情両ゝ難し。倘公道とりて論ぶれば人情を如何。人情の
隨よ説けば。公道を缺く。只理とりとれを推とれゝ。柱よ勝ゝて。琴を
調ゝぶビ。夫みづゝゝえどゝて彼をゝ。みづゝゝ沿ビて彼を得る
ものゝ。それ人の沿ふを沿て。みづゝゝその沿ふを得ビ。人の適くよ適て。
みづゝゝその適よ適ざるものゝ。孔子ハ仁義を重て。盗跖ハ利欲を重と
ふ。各沿ふ所をとりて。その沿ざる所を責む。相罵ふとれハ。声の大ふるものの
ふれよ勝。相闘ふとれハ猛ものゝ必ずこれよ勝。彼ゝ勝べゝとざる所とりて。
ふまて勝ものゝ慾を重とふる所以。ふゝ勝べ所とりて。それよ勝ざ
ものゝ。仁を重とふる所以。像為の眼力ハ真の强弱を見ビて。
走るものゝ必疾く。勝ものゝ必ずづゝ强ビ。匹夫人妻ハ是ビ天よ勝。天定て
人よ勝。天の弱ふよあらず。人の强ふよあらず。寡ハ固よりて衆よ敵

ずして。小人間よりて。大なる敵しがたし。苟も情慾愛欲とそれは。仁義もそれ
より勝ぐ。一條の箭ハおりがて。恩愛と色慾
とハ人情の聚る所。人欲繁ければ。山も四方。人情の聚る所必濁る。
水清けれバ魚住ず。人清りれば慾寡し。清き紙捨て濁よ拾ひ
安処を取りて。危きを楽む。そ紙ありて濁るものハいよ〳〵濁り。危処ありて
いよ〳〵危し。既にその危きを知る。知りといへども安らぐ。版の中
みなる母砂あり。泥の中みも刺るゝよあらんどこれを懼て。石紙ありのを
擇ま。擇まを人ま拾ま見るゝおんぞ。只その獨ど慎むよあんど。

夢想兵衛胡蝶物語巻之三終